



図書館通信

最上校図書委員会 No.26 2月27日

2024年 本屋大賞 4月10日発表!

どの本が本屋大賞1位になるか、予想してみましょう?

ご卒業おめでとう

3年生を送る会



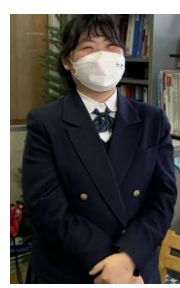
2月22日(木)12時40分から、図書館司書室で3年生を送る会を行いました。菅花織さんは2年の後期からは、委員長として、松田朱那さんは2年からの参加でしたが、委員として、自分達から企画のアイデアを考え、積極的に参加し、仕事を進んで

見つけ活動をしてくれ、2人で委員会を盛り上げてくれました。花織さんは3年間、朱那さん2年間、本当にご苦労様でした。そして、ありがとう。個性豊かな1年生と2年生を良く引っ張ってきてくれました。何とか、後輩達に仕事の引き継ぎが出来、しっかり引き継いでくれたように思います。



3年生からは、後輩達への感謝と期待の言葉が発表されました。在校生からは、代表して、委員長佐藤悠梨奈さんからは、4月から進学、就職する先輩方に3年間の慰労と激励の言葉が発表され、色紙を渡すことができました。

短い時間ではありましたが、3年生からのバトンをしっかり継ぎました。



売りたい本 いちばん! 全図書委員が選んだ

2024年ノミネート作決定!

本屋大賞

2024年本屋大賞



- 『黄色い家』川上未映子(著)
- 『君が手にするはずだった黄金について』小川哲(著)
- 『水車小屋のネネ』津村記久子(著)
- 『スピノザの診察室』夏川草介(著)
- 『存在のすべて』塩田武士(著)
- 『成瀬は天下を取りに行く』宮島未奈(著)
- 『放課後ミステリクラブ 1 金魚の泳ぐプール事件』知念実希人(著)
- 『星を編む』凧良ゆう(著)
- 『リカバリー・カバヒコ』青山美智子(著)
- 『レーエンデ国物語』多崎礼(著)

朝読書にオススメの新刊！



『エヴァーグリーン・ゲーム』 石井仁蔵著



世界有数の頭脳スポーツであるチェスと出会い、その面白さに魅入られた4人の若者たち。64マスの盤上で、命を懸けた闘いが繰り広げられる。彼らは己の全てをかけて、チェスプレイヤー日本一を決めるチェスワングランプリに挑むことに。チェスと人生がドラマティックに交錯する、熱い感動のエンターテインメント作！

『星を編む』 凧良ゆう著



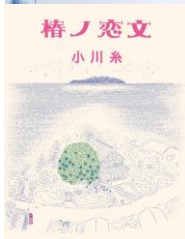
「汝、星のごとく」で語りきれなかった愛の物語。瀬戸内の島で出会った権と暁海。二人を支える教師・北原が秘めた過去。彼が病院で話しかけられた教え子の菜々が抱えていた問題とは？

『わたしに会いたい』 西加奈子著



コロナ禍以前の2019年より、自身の乳がん発覚から治療を行った22年にかけて発表された7編と、書き下ろし1編を含む、全8編。

『椿の恋文』 小川糸著



「いつか」ではなく、今、大切な人に伝えたい。家事と育児に奮闘中の鳩子が、いよいよ代書屋を再開します。代書屋としても、母親としても、少し成長した鳩子に会いにぜひご来店ください。

『カーテンコール』 筒井康隆著



著者曰く「これがおそらくわが最後の作品集になるだろう」（編集者「信じていません！」）。筒井文学の主要人物が打ち揃う「プレイバック」をはじめ、巨匠がこれまで蓄積した^{きりょう}技術と思索の全てを注いだ、痙攣的笑い、恐怖とドタバタ、胸えぐる感涙、いつかの夢のごとき抒情などが横溢する圧倒的傑作集！

『嘘をついたのは、初めてだった』 青羽悠他

書き出しの一行は全員「嘘をついたのは、初めてだった」。でもそこからあとは、十人十色、二十九人二十九色。

『きこえる』 道尾秀介著

作中の様々なタイミングで二次元コードが登場し、コードを読み取り、音声を再生することにより小説世界へ深く入り込むことができます。

『ツミデミック』 一穂ミチ著

渦中の人間の有様を描き取った、心震える全6話。

『無敵の犬の夜』 小泉綾子著

北九州の片田舎で暮らす中学生が、東京のラッパーを倒しにカチコミへ向かうという破格の青春爆走劇。

『人間標本』 湊かなえ著

人間も一番美しい時に標本にできればいいのにな？

『変な家 2』 雨穴著

あなたは、この「11の間取り」の謎が解けますか？前作に続き、フリーライターの筆者と設計士・栗原のコンビが不可解な間取りの謎に挑む。

『17歳のピオトープ』 清水晴木著

謎多き校務員と悩みを抱える4人の高校生が織りなす物語。

『東京都同情塔』 九段 理江著

ザハの国立競技場が完成し、犯罪者は同情すべきという「寛容論」が浸透したもう一つの日本で、新しい刑務所「シンパシータワートーキョー」が建てられることに。犯罪者に寛容になれない建築家・牧名沙羅は、仕事と信条の乖離に苦悩しながらパワフルに未来を追求する。

『ともぐい』 河崎 秋子著

己は人間のなりをした何ものか——人と獣の理屈なき命の応酬の果てには。明治後期の北海道の山で、猟師というより獣そのものの嗅覚で獲物と対峙する男、熊爪。凶らずも我が領分を侵した穴持たずの熊、蠱惑的な盲目の少女、ロシアとの戦争に向かってきな臭さを漂わせる時代の変化……すべてが運命を狂わせてゆく。人間、そして獣たちの業と悲哀が心を揺さぶる、河崎流動物文学の最高到達点！



※ぜひ、図書館へ！